

東京都立大学 子ども・若者貧困研究センター

ヤングケアラーと生活困難度との 関連について

Working Paper Series Vol.36

堀口 涼子

2024 年 3 月 27 日

この Working Paper の内容は著者によるものであり、当センターおよび東京都立大学の見解を反映したものではありません。なお、一部といえども無断で引用、再録することを禁じます。

子ども・若者貧困研究センター



TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY

東京都立大学

ヤングケアラーと生活困難度との関連について

The relationship between young carers and poverty

堀口 涼子（東京都立大学 子ども・若者貧困研究センター特任研究員）

1 はじめに

（１）ヤングケアラーの背景と定義

ヤングケアラーとは、「本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話などを日常的に行っていることにより、子ども自身がやりたいことができないなど、子ども自身の権利が守られていないと思われる子ども」をいう[一般社団法人日本ケアラー連盟, 2023]。諸外国によってヤングケアラーの定義は異なる。

イギリスにおいては、「他の人のためにケアを提供している、または提供しようとしている、18 歳未満の者（ただし、ケアが、契約に従って行なわれている場合、ボランティア活動として行なわれている場合は除く）」[The United Kingdom, 2014]と定義づけられ、約 16 万 6 千人のヤングケアラーが存在していることが報告されている[Office for National Statistics, 2013]。また、イギリスのヤングケアラーが抱える問題について、マイナスの側面としては、介護の責任により積極的な社会生活や自分の趣味を追求する機会に対して制限があり、心理的な健康やウェルビーイング・人間関係・学業への取り組みや成績・人生設計等において影響を及ぼす場合があることが論じられている。反対に、プラスの側面としては、家族との絆や生活能力を習得することや、自分の介護の役割と家庭での貢献から生じる誇りから自己価値を高めることなどがあげられている[Young Carers Research Group, 2016]。また、イギリスでは子どもがケアを担うことは、貧困やひとり親という家

族構成、支援サービスの利用可能性などに起因すると主張されている[亀山, 2021]。貧困が最終的にヤングケアラーに結び付くプロセスとしては、病気や障害のある家族がいるとき、就労や稼働収入が制約され、より高い生活コストが生じ、さらにひとり親世帯では、ほかにケアを提供できる大人がいないことが低所得と結びつき、障害のある親は子どもに頼らざるを得なくなる、とされている[Keith, L. and Morris, J., 1995]。そのため、ヤングケアラー家族の貧困を視野に入れる必要性が指摘されている[Keith, L. and Morris, J., 1995; Olsen, R., 1996; Olsen, R., 2000]。

日本におけるヤングケアラーのイメージとして、一般社団法人日本ケアラー連盟から「障がいや病気のある家族に代わり、買い物・料理・掃除・洗濯などの家事をしている」「家族に代わり、幼いきょうだいの世話をしている」「障がいや病気のあるきょうだいの世話や見守りをしている」「目を離せない家族の見守りや声かけなどの気づかいをしている」など 10 項目があげられており、定義の内容が多岐にわたる[一般社団法人日本ケアラー連盟, 2023]。三菱UFJ リサーチ & コンサルティング株式会社が中高生を対象に 2020 年に実施した調査によると、自分がヤングケアラーにあてはまると回答したのは中学 2 年生で 1.8%(全体数 5558 人)、全日制高校 2 年生で 2.3%(全体数 7407 人)、定時制高校 2 年生相当で 4.6%(全体数 366 人)、通信制高校生で 7.2%(全体数 446 人)であった[文部科学省, 三菱 UFJ, 2021]。宮川らによる大阪府立高校の生徒を対象とした調査では、有効回答 5246 人中、障がいまたは疾病等を有する家族がおりケアをしているヤングケアラーは 233 人(5.2%)であった。ケア負担が大きい場合、ヤングケアラーの生活満足感や各種自覚症状にもとづいた主観的健康観に悪影響が生じることが示唆されている[宮川, 2021]。ヤングケ

アラールは家庭でのケアが長期化する中では、その負担が積み重なり、最終的に不登校や中退へとつながっていく可能性がある[澁谷, 2017]。ヤングケアラーである子どもたちは家族の世話について相談した経験が「ない」割合が5~6割にもおよぶことから[文部科学省, 三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング, 2021]、自ら SOS を発することが難しい場合が多く、行政や福祉分野がアウトリーチ活動を行い、直接的な支援を行うことが必要となる。そのためには、ヤングケアラーがどのような家庭環境で起こりうるのか、解明する必要がある。

(2) 先行研究の紹介とその限界

日本においてヤングケアラー対象者に関する質問紙調査は、ヤングケアラーの実態に関する調査[文部科学省, 三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング, 2021]をはじめとする各自自治体のヤングケアラー実態調査、宮川らによる大阪府立高校の生徒を対象とした調査[宮川, 2021]がある。これらの調査では、中高生を対象としており、小学生は含まれていない。宮川ら(2021)はヤングケアラーを抽出する際、設問の文章を「あなたの家族には、高齢である、幼い、病気や障がいがある、日本語が第一言語でない等のために、介護、お手伝い、精神的サポートを必要としている人がいますか」とし、「はい」と回答した者には、ケアを要する家族は誰か、要ケア家族の状態を尋ねると共に、自分自身が現在要ケア家族のためにケアをしているかどうかを尋ね、ヤングケアラーを定義づけている。さらに、この抽出されたヤングケアラーの中には、障がいまたは疾病等があるのではなく、幼いきょうだいがいるという理由のみでケアを担っているものも含まれており、そのような者をヤングケアラーとみなすかについては議論があったことから[Office for National Statistics, 2013]、

要ケア家族が弟・妹であり、まだ幼いため世話が必要であるのみを選択していたものとそれ以外のものに分けて比較している。この研究においては、実際のケアラーとしての活動時間をヤングケアラーの定義に用いていない。ヤングケアラーの実態に関する調査報告書（2021）では、世話をしている家族の有無について質問し、自分がヤングケアラーにあてはまると思うか質問している。中学2年生、全日制高校2年生では「あてはまる」と答えた割合が約2%、定時制高校2年生相当は4.6%、通信制高校生は7.2%で、「わからない」と答えた割合はいずれの学校種でも1~2割だった。また、名城による沖縄県A市におけるヤングケアラーの実態調査（2023）では、小中学生を対象とし、調査項目はヤングケアラーの実態に関する調査（2020）で使用された内容を踏襲し、世話をしている家族の有無や自分がヤングケアラーにあてはまると思うかについて質問している。この中で自分がヤングケアラーに「あてはまる」と答えた割合は3.1%、「わからない」は17.2%であった。これら二つの研究は実態調査のため、ヤングケアラーを明確に定義づけて他の変数との関連をみる分析はされていない。また、宮川らの研究ではヤングケアラーの生活満足感および主観的健康観のみに焦点が当てられている[宮川, 2021]。いずれの調査においても、こどものみに質問してヤングケアラーと判定された対象者のみの分析にとどまっている。

日本におけるヤングケアラーと貧困やひとり親を論じた研究としては、北山の研究（2015）があげられるが、教員を対象者として調査しており、ヤングケアラー当事者を対象としていない。また、子どもに対して家事・きょうだいの世話の活動頻度を質問し、その活動時間からヤングケアラーを定義づけて家庭環境との関連を包括的に調べた研究はない。

(3) 本研究の目的

本研究では、小学 5 年生、中学 2 年生、16～17 歳年齢を対象に行われた平成 28 年度 (2016 年度) 東京都子どもの生活実態調査のデータからヤングケアラーの定義にあてはまる対象者を抽出し、ヤングケアラーであることと、家庭環境 (生活困難度、世帯タイプ) にどのような関連があるかロジスティック回帰分析を用いて検討した。

2 方法

(1) 対象および方法

本研究で分析に用いたデータは、2023 年度に東京都立大学大学院人文科学研究科 (子ども・若者貧困研究センター) を通じ、「子どもの貧困調査研究コンソーシアム」より提供された 2016 年の東京都子どもの生活実態調査 (以下、2016 調査) (調査地域: 日野市、調布市、豊島区、墨田区) の個票データである。2016 調査の生活実態調査の調査対象者年齢である小学 5 年生、中学 2 年生、16～17 歳の個票データを統合して分析に用いた。今回作成した統合データに含まれていた調査対象者のうち、親子がマッチングしていたものは小学 5 年生で 2,824 サンプル、中学 2 年生で 2,865 サンプル、16～17 歳で 2,576 サンプルであった。

(2) 調査項目

- ・本研究におけるヤングケアラーの設定について

ヤングケアラーの経験の有無は、一般社団法人日本ケアラー連盟の定義と、ヤングケアラーの実態に関する調査 (2020) を参考にした。ヤングケアラーの実態に関する調査 (2020)

において、一日当たり世話に費やす時間は、中学 2 年生の平均は 4.0 時間、全日高校 2 年生の平均は 3.8 時間だった。しかしながら、ヤングケアラーの実態に関する調査（2020）では世話をしている家族が「いる」と回答した中高生を、全てヤングケアラーと定義していることと、世話をしている家族が「いる」と回答した中高生の中で、「1 か月に数日」でもヤングケアラーの中に入っていることから、本研究では、「家事」や「きょうだいの世話」で「毎日 1 時間以上」より活動時間が多い項目（「毎日 2 時間以上」「毎日 1～2 時間」）を選択しているものをヤングケアラーと設定した。2016 調査においては、こども票の活動時間を聞く項目教示文：「あなたは、以下の活動を、ふだんどれくらいしますか。」で挙げられている活動の 2 項目「E 家事（洗濯、掃除、料理、片付けなど）」「F きょうだいなどの世話」を対象とした。

ヤングケアラーであることを目的変数（従属変数）として設定し、ヤングケアラーであることに関連する要因の説明変数（独立変数）として、保護者票の質問項目から算出された生活困難度と世帯タイプを設定した。変数の詳細は下記の通りである。

・生活困難度（保護者票から算出）：2016 調査報告書にて用いられた貧困指標であり[東京都立大学子ども・若者貧困研究センター, 2017]、世帯所得、子どもの所有物・体験の欠如（多くの子どもが享受している体験や所有物が、経済的な理由により得られていない状況）、家計の逼迫（生活必需品を買えない状況）の 3 軸から構成される。この 3 軸のうち、2 つ以上の要素に該当する世帯を困窮層、いずれか 1 つの要素に該当する世帯を周辺層、いずれの要素にも該当しない世帯を一般層とした。生活困難度指標の信頼性および妥当性は既に検証されている[阿部, 2018]。

・世帯タイプ（保護者票から算出）：2016 調査報告書にて用いられた世帯タイプを「ふたり親（二世代）」「ふたり親（三世代）」「ひとり親（二世代）」「ひとり親（三世代）」の4つに分ける指標である[東京都立大学子ども・若者貧困研究センター, 2017]。本研究では「ひとり親（二世代）」「ひとり親（三世代）」を「ひとり親」に、「ふたり親（二世代）」「ふたり親（三世代）」を「ふたり親」にそれぞれまとめて分析をおこなった。

・性別（こども票）調査における性別を問う設問から、男子、女子のいずれかを選択している回答を分析対象とした。

（3）統計解析

まず、各年齢層ごとに、ヤングケアラーの割合を示した。次に、ロジスティック回帰分析により、小5、中2、16～17歳における「E 家事（洗濯、掃除、料理、片付けなど）」と「F きょうだいなどの世話」各々のヤングケアラーの有無を従属変数に、独立変数を生活困難度、世帯タイプ、性別に設定して、各変数の関連を検討した。分析の際、独立変数の設定は、全ての変数を入れる強制投入法を用いた。統計ソフトは Stata17(StataCorp, College Station, TX)を用い、有意水準は両側5%とした。

（4）倫理的配慮

2016 調査は、無記名で回収され、個人情報特定されないように配慮された。子どもが記入する調査票と保護者が記入する調査票は、各々封入できる子ども用封筒、保護者用封筒を用意し、親が子どもの回答をみる、またはその逆がないように設計された。2016 の調査データの利用については、東京都の条例に基づき、東京都立大学が研究目的のための二次利用許可を得た。

3 結果

(1) 本研究でヤングケアラーと定義された割合について

本研究でヤングケアラーと定義された対象者の割合を図 1 に示す。家事ヤングケアラーとして抽出された人数は、小学 5 年生は 152 人 (5.5%)、中学 2 年生は 142 人 (5.0%)、16~17 歳は 161 人 (6.3%) であった。きょうだいの世話ヤングケアラーとして抽出された人数は、小学 5 年生は 405 人 (15.1%)、中学 2 年生は 175 人 (6.2%)、16~17 歳は 83 人 (3.3%) であった。

(2) ロジスティクス回帰分析の結果

表 1、表 2、表 3 は、ロジスティック回帰分析による家事ヤングケアラーときょうだいの世話ヤングケアラーに関連する要因のオッズ比と 95% 信頼区間を示したものである。

表 1 では、小学 5 年生の家事ヤングケアラーにおいて、生活困難度が一般層と比較して、困窮層（オッズ比：2.05，95%信頼区間：1.06-3.94）が、男子と比較して女子（オッズ比：1.63，95%信頼区間：1.12-2.38）の方でヤングケアラーが多かった。

表 2 の中学 2 年生の家事ヤングケアラーにおいて、生活困難度が一般層と比較して、困窮層（オッズ比：2.60，95%信頼区間：1.42-4.76）と周辺層（オッズ比：1.99，95%信頼区間：1.23-3.22）でヤングケアラーが多かった。

表 1 の小学 5 年生のきょうだいの世話ヤングケアラーにおいて、一般層と比較して困窮層（オッズ比：1.63，95%信頼区間：1.00-2.65）が、男子と比較すると女子（オッズ比：1.28，95%信頼区間：1.00-1.63）の方がヤングケアラーが多かった。世帯タイプではふたり親家庭と比較するとひとり親（オッズ比：0.47，95%信頼区間：0.28-0.80）の方でヤン

グケアラーが少なかった。

表2の中学2年生のきょうだいの世話ヤングケアラーにおいては、一般層と比較すると、周辺層（オッズ比：1.99，95%信頼区間：1.30-3.05）のヤングケアラーが多かった。

表3の16～17歳のきょうだいの世話ヤングケアラーにおいては、一般層と比べると周辺層（オッズ比：2.09，95%信頼区間：1.18-3.72）が、男子と比較すると女子（オッズ比：1.81，95%信頼区間：1.06-3.09）の方でヤングケアラーが多かった。

4 考察

（1）ヤングケアラーの割合について

本研究でヤングケアラーと定義された割合は、家事のヤングケアラーでは各年齢層で約5%～6%であり、年度による変化はなかった。16～17歳はきょうだいの世話のヤングケアラーは約3%であったが、特徴的な結果は小学5年生で、その割合は15.1%であった。近年ヤングケアラーの実態調査が多数の自治体で行われているが、対象者は中高生が多い。小学生を対象とした調査におけるヤングケアラーの割合は国の調査（2022）の小6では6.5%、北海道調査（2022）の小5・小6で4.7%、熊本県調査（2022）の小6で6.3%、長野県調査（2022）の小5・小6で11.6%、沖縄県における名城（2023）の調査の小5・小6で14.9%であった。自治体による調査規模や設問項目が異なることから、調査によってヤングケアラーの定義は異なるためその比較は難しいが、小学5年生はきょうだいの世話のヤングケアラーの割合が多い結果となった。各自治体の実態調査では世話をしている家族の有無でヤングケアラーを判定している。ヤングケアラーについては、家庭内のデリ

ケートな問題であることや、本人や家族に自覚がないことが課題となっている[北海道, 2022]。今回分析した生活実態調査の 2016 調査・2022 調査では、家事の時間、きょうだいの世話の時間を設問ごとに詳細に聞く方法であったため回答しやすく、潜在的なヤングケアラー対象者が表面化し、割合が高くなったと考えられる。

(2) ヤングケアラーと貧困の関連について

家事のヤングケアラーでは、2016 調査の小 5 では困窮層、2016 調査の中 2 では困窮層と周辺層において、一般層と比較するとヤングケアラーが多い傾向があった。また、きょうだいの世話ヤングケアラーでは、2016 調査の小 5 では困窮層、中 2 では周辺層、16～17 歳では周辺層において、一般層と比較するとヤングケアラーが多い傾向があった。イギリスにおいては、1990 年代から子どもにケアを促す要因は、病気や障害それ自体ではなく貧困やひとり親という家族構成であると主張され始め[Keith & Morris1995; Olsen 1996]、Vizard (2019) は実際に他の子どもの貧困率と比較してヤングケアラーの貧困率が高いことを低所得と物質的はく奪を組み合わせた指標で示した。本研究において信頼性と妥当性が検証された貧困指標である生活困難度を用いたことにより、イギリス同様、日本においても貧困とヤングケアラーとの関連性を示すことができたと考えられる。実際のひとり親世帯という家族構成もヤングケアラーと関連があることが予想されたが、本研究における小 5 ではひとり親世帯においてヤングケアラーが少ない傾向があった。このため、ひとり親世帯におけるヤングケアラーとの関連性は明確に示すことはできなかった。

(3) ヤングケアラーと性別の関連について

家事ヤングケアラーの小 5、きょうだいの世話ヤングケアラーの小 5、16～17 歳におい

て、男子と比較すると女子の方がヤングケアラーが多い傾向があった。子どもの家事遂行は、性別によって頻度や内容が異なり、男子と比べて女子の家事頻度は高く[鳥羽, 久保, 2013]、掃除や料理、きょうだいの世話など家の中で行われる家事は女子が行うことが多い[White, 1981]。これらの理由から、本研究でも、家事やきょうだいの世話は女子の傾向が高くなったと考えられる。

(4) ヤングケアラーに関する政策提言について

本研究の結果を踏まえた上で、ヤングケアラーに対する政策提言を記載する。ヤングケアラーについては、本人や家族に自覚がないことが課題となっているが[北海道, 2022]、本研究におけるヤングケアラーの割合は、特に小学5年生のきょうだいの世話において高い割合となった。まず第一に、各個人がヤングケアラーの定義にあてはまるかもしれないという自覚を持たせるために、子どもや家族に対するヤングケアラーに関する周知を広く行う必要がある。また、ヤングケアラーは家族以外の人と自分のことについて話さない傾向があり、その理由には助けを求めることが家族の分離につながるという不安、ソーシャルサービスに対する明確な不信感の二つがあげられる[Young Carers Research Group, 2016]。現在、東京都ではヤングケアラーの相談支援を行う団体に対して支援を行っている[東京都福祉局, 2023]。ヤングケアラー実態調査において、世話について相談した経験がない理由で多かったものは、「誰かに相談するほどの悩みではない」「相談しても状況が変わると思えない」であった。これらの理由から、ヤングケアラーの相談場所があることを広く一般認知化させる取り組みを行う必要がある。本研究の結果より、貧困とヤングケアラーに関連が見られたことから、貧困対策に取り組む行政が家庭訪問などアウトリーチ活動を

行う際に、ヤングケアラーの存在を意識して活動を行う必要があると考えられる。また、「相談しても状況が変わると思えない」とヤングケアラーの子どもたちに思わせないよう、サポートの内容に関しても、専門職が話を聞くだけではなく、親の介護を福祉のサポートで補い、ヤングケアラーの子どもたちの自由な活動時間を実際に増やすなど、個々のヤングケアラーのニーズに合わせて支援を調整する必要がある。

(5) 強みと限界

本研究ではこどもの生活実態調査という子ども票と保護者票をマッチングできる調査により、ヤングケアラーとして定義された子どもたちの家庭環境を分析することができた。また、家事のヤングケアラー、きょうだいの世話のヤングケアラーと2つの質が異なるヤングケアラーを設定することができ、貧困との関連性を示すことができた。しかし、本研究にはいくつかの限界があった。第一に、日本におけるヤングケアラーの定義が多岐にわたるため、焦点化できなかった可能性がある。第二に、先行研究を参考に貧困からヤングケアラーが生じるプロセスで分析したが、横断的調査のため、時間的な先行性を確定することは難しいと考えられる。第三に、調査対象が東京都の都市部のため、分析結果の一般化には限界があるといえる。今後他の自治体のデータも合わせた大規模データにおいても同様の結果が得られるか、検討を行いたい。

本研究は、学変(A)22H05097K1の研究費助成を受けて行われている。なお、開示すべきCOIはない。

4 参考文献

阿部 彩, 2018, 「日本版子どもの剥奪指標の開発」 東京都立大学子ども・若者貧困研究

センター Working Papers WP1. 2018. [https://beyond.research-](https://beyond.research-miyacology.tmu.ac.jp/child-and-adolescent-poverty/research-results/workingpapers.html)

[miyacology.tmu.ac.jp/child-and-adolescent-poverty/research-](https://beyond.research-miyacology.tmu.ac.jp/child-and-adolescent-poverty/research-results/workingpapers.html)

[results/workingpapers.html](https://beyond.research-miyacology.tmu.ac.jp/child-and-adolescent-poverty/research-results/workingpapers.html) (2023年9月13日アクセス可能)

一般社団法人日本ケアラー連盟, 2023, ヤングケアラーとは,

<https://carersjapan.com/about-carer/young-carer/>, (2023年9月13日アクセス

可能).

亀山裕樹, 2021, 「ヤングケアラーをめぐる議論の構造：貧困の視点を中心に」 『北海

道社会福祉研究』 41: 35-47.

北山沙和子, 石倉健二, 2015, 「ヤングケアラーについての実態調査-過剰な家庭内役割を

担う中学生」『兵庫教育大学学校教育学研究』, 兵庫教育大学, 27:25-29.

熊本県, 2022, 令和4年度ヤングケアラーの実態に関する調査結果につい

て,<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/36/167081.html>, (2023年9月13日アク

セス可能).

澁谷智子, 2017, 「ヤングケアラーを支える法律イギリスにおける展開と日本での応用可

能性」『成蹊大学文学部紀要』成蹊大学, 52: 1-21.

東京都立大学子ども・若者貧困研究センター, 2017, 東京都子供の生活実態調査（小中高

等調査） [https://beyond.research-miyacology.tmu.ac.jp/child-and-adolescent-](https://beyond.research-miyacology.tmu.ac.jp/child-and-adolescent-poverty/survey-of-childrens-living-conditions/)

[poverty/survey-of-childrens-living-conditions/](https://beyond.research-miyacology.tmu.ac.jp/child-and-adolescent-poverty/survey-of-childrens-living-conditions/), (2023年9月13日アクセス可能).

鳥羽 波峰, 久保 桂子, 2013, 「小学生の家事参加に影響する要因と家事参加を促進する

家庭科の授業」『日本家庭科教育学会誌』, 55(4): 227-236.

東京都福祉局, 2023, 東京都ヤングケアラー支援マニュアル（令和5年3月発行）

<https://www.fukushi.metro.tokyo.lg.jp/kodomo//kosodate/young-carer.html>,

(2023年9月13日アクセス可能).

長野県, 2022, 長野県ヤングケアラー実態調査,

<https://www.pref.nagano.lg.jp/jisedai/20221219.html>, (2023年9月13日アクセス

可能).

日本総研, 2022, ヤングケアラーの実態に関する調査研究,

<https://www.jri.co.jp/page.jsp?id=102439>, (2023年9月13日アクセス可能).

北海道, 2022, 北海道ヤングケアラーに関する実態調査,

<https://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/kms/98815.html>, (2023年9月13日アクセス可

能).

宮川雅充, 濱島淑恵, 2021, 「ヤングケアラーの生活満足感および主観的健康感：大阪府

立高校の生徒を対象とした質問紙調査」『日本公衆衛生雑誌』 68(3):157-166.

文部科学省, 三菱UFJリサーチ & コンサルティング, 2021, ヤングケアラーの実態に関す

る調査研究報告書, [https://www.murc.jp/wp-](https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2021/04/koukai_210412_7.pdf)

[content/uploads/2021/04/koukai_210412_7.pdf](https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2021/04/koukai_210412_7.pdf), (2023年9月13日アクセス可能).

Children and Families Act 2014, 「2014 年子どもと家族に関する法律」の第 96 条「ヤン

グケアラー」(1) の 17ZA(3) および 17ZB(3) の項目より

(<http://www.legislation.gov.uk/ukpga/2014/6/section/96/enacted>, (2023年9月13日アクセス可能).

Keith, L. and Morris, J, 1995, “Easy targets: A disability rights perspective on the ‘children as carers’ debate” Critical Social Policy, 15(44-45): 36-57.

Office for National Statistics 2013, Office for National Statistics, 2013, ‘Providing unpaid care may have an adverse affect on young carers’ general health’

(<http://webarchive.nationalarchives.gov.uk/20160105160709/http://www.ons.gov.uk/ons/rel/census/2011-census-analysis/provision-of-unpaid-care-in-england-and-wales--2011/sty-unpaid-care.html>) , (2023年9月13日アクセス可能).

Olsen, R, 1996, “Young carers: Challenging the facts and politics of research into children and caring” Disability & Society, 11(1): 41-54.

Olsen, R, 2000, “Families under the microscope: Parallels between the young carers debate of the 1990s and the transformation of childhood in the late nineteenth century” Children & Society, 14(5): 384-394.

Vizard, P., Obolenskaya, P. and Burchardt, T., 2019, “Child poverty amongst young carers in the UK: Prevalence and trends in the wake of the financial crisis, economic downturn and onset of austerity” Child Indicators Research, 12(5): 1831-1854.

LK White, DB Brinkerhoff, 1981, “The sexual division of labor: Evidence from childhood” Social Forces, 60(1): 170–181.

Young Carers Research Group, Loughborough University, 2016, “The lives of young carers

in England Qualitative report to DfE”

https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/498115/DFE-RR499_The_lives_of_young_carers_in_England.pdf, (2023年9月13日アクセス可能).

5 図表

図1 2016 調査における「E 家事（洗濯、掃除、料理、片付けなど）」「F きょうだいなどの世話」ヤングケアラーの割合（全年齢層）

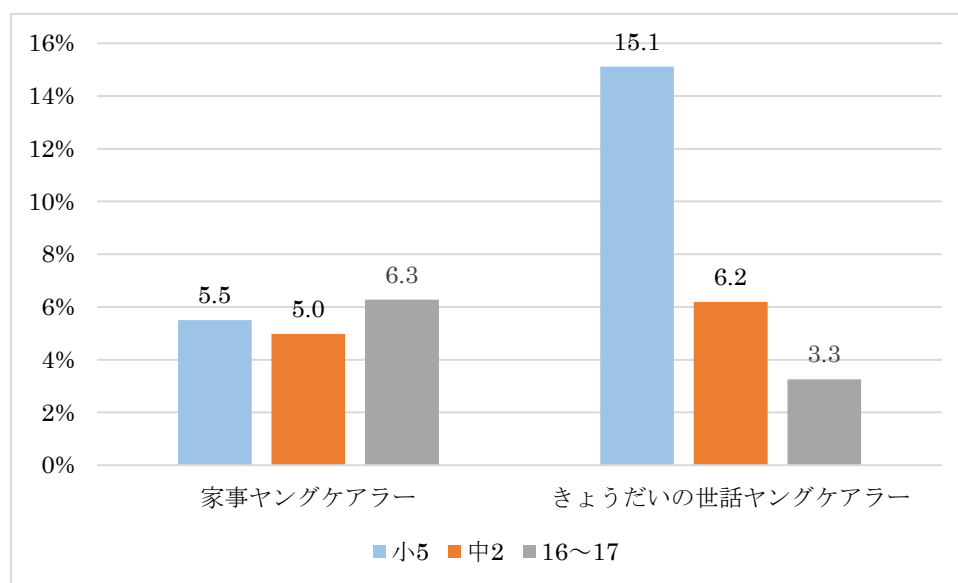


表1 小学5年生ロジスティクス回帰分析の結果（2016 調査におけるヤングケアラーと生活困難度・世帯タイプ・性別の関連について）

† p<0.10 *p<0.05 **p<0.01

2016調査小学5年生年齢 家事のヤングケアラー		全変数投入モデル				
		オッズ比	標準誤差	z	P値	[95% 信頼区間]
生活困難度						
	一般層	1.000				
	困窮層	2.049	0.684	2.150	*0.032	1.064 3.943
	周辺層	1.306	0.338	1.030	0.301	0.787 2.168
世帯タイプ						
	ふたり親	1.000				
	ひとり親	0.809	0.274	-0.620	0.533	0.417 1.573
性別						
	男子	1.000				
	女子	1.633	0.314	2.550	*0.011	1.120 2.381
定数		0.042	0.007	-19.380	**0.000	0.031 0.058
N		2,149				
Log likelihood		-462.860				
X 2		11.190				
Pseudo R2		0.012				
2016調査小学5年生年齢 きょうだいの世話の ヤングケアラー		全変数投入モデル				
		オッズ比	標準誤差	z	P値	[95% 信頼区間]
生活困難度						
	一般層	1.000				
	困窮層	1.626	0.405	1.950	† 0.051	0.998 2.649
	周辺層	1.173	0.204	0.920	0.358	0.835 1.649
世帯タイプ						
	ふたり親	1.000				
	ひとり親	0.473	0.127	-2.790	**0.005	0.279 0.800
性別						
	男子	1.000				
	女子	1.277	0.157	1.990	*0.047	1.003 1.626
定数		0.158	0.016	-18.740	**0.000	0.131 0.192
N		2,084				
Log likelihood		-882.667				
X 2		15.140				
Pseudo R2		0.009				

表2 中学2年生ロジスティクス回帰分析の結果（2016 調査におけるヤングケアラーと生活困難度・世帯タイプ・性別の関連について）

† p<0.10 *p<0.05 **p<0.01

2016調査中学2年生年齢 家事のヤングケアラー		全変数投入モデル				
		オッズ比	標準誤差	z	P値	[95% 信頼区間]
生活困難度						
	一般層	1.000				
	困窮層	2.603	0.801	3.110	**0.002	1.424 4.759
	周辺層	1.987	0.489	2.790	**0.005	1.226 3.218
世帯タイプ						
	ふたり親	1.000				
	ひとり親	1.308	0.366	0.960	0.337	0.756 2.262
性別						
	男子	1.000				
	女子	1.117	0.222	0.560	0.576	0.757 1.648
定数		0.038	0.006	-19.710	**0.000	0.027 0.052
N		2,214				
Log likelihood		-425.709				
X ²		17.570				
Pseudo R ²		0.020				
2016調査中学2年生年齢 きょうだいの世話の ヤングケアラー		全変数投入モデル				
		オッズ比	標準誤差	z	P値	[95% 信頼区間]
生活困難度						
	一般層	1.000				
	困窮層	1.451	0.495	1.090	0.275	0.744 2.832
	周辺層	1.990	0.433	3.160	**0.002	1.299 3.048
世帯タイプ						
	ふたり親	1.000				
	ひとり親	0.772	0.234	-0.860	0.393	0.426 1.398
性別						
	男子	1.000				
	女子	1.299	0.233	1.460	0.145	0.914 1.845
定数		0.051	0.008	-19.970	**0.000	0.038 0.068
N		2,199				
Log likelihood		-507.069				
X ²		11.710				
Pseudo R ²		0.011				

表 3 16～17 歳ロジスティクス回帰分析の結果（2016 調査におけるヤングケアラーと生活困難度・世帯タイプ・性別の関連について）

† p<0.10 *p<0.05 **p<0.01

2016調査16～17歳年齢 家事のヤングケアラー		全変数投入モデル					
		オッズ比	標準誤差	z	P値	[95% 信頼区間]	
生活困難度							
	一般層	1.000					
	困窮層	1.403	0.493	0.970	0.334	0.705	2.793
	周辺層	1.303	0.318	1.080	0.279	0.807	2.103
世帯タイプ							
	ふたり親	1.000					
	ひとり親	1.315	0.342	1.050	0.292	0.790	2.188
性別							
	男子	1.000					
	女子	1.321	0.257	1.430	0.153	0.902	1.934
定数		0.048	0.008	-18.400	**0.000	0.035	0.067
N		1,946					
Log likelihood		-436.680					
X 2		5.810					
Pseudo R2		0.007					
2016調査16～17歳年齢 きょうだいの世話の ヤングケアラー		全変数投入モデル					
		オッズ比	標準誤差	z	P値	[95% 信頼区間]	
生活困難度							
	一般層	1.000					
	困窮層	0.566	0.420	-0.770	0.443	0.132	2.424
	周辺層	2.090	0.614	2.510	*0.012	1.175	3.718
世帯タイプ							
	ふたり親	1.000					
	ひとり親	0.874	0.347	-0.340	0.734	0.402	1.902
性別							
	男子	1.000					
	女子	1.808	0.495	2.160	*0.031	1.056	3.093
定数		0.020	0.005	-16.030	**0.000	0.013	0.033
N		1,939					
Log likelihood		-265.134					
X 2		11.800					
Pseudo R2		0.022					